

偶感

野村正実（東北大学経済学部 教授）

<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~nomura/impression.htm#040920>

（2004年7月6日）

いま私は、戦前の経営身分制との関係で、戦後の経営民主化によって企業と学歴主義がどのように変わったのかについて、原稿を書きはじめている。その中で補足的に、高等専門学校卒業生の企業内待遇について、次のような文章を挿入しようと思っている。

補説 高等専門学校卒業生と企業内待遇

戦後の学校教育体系は6・3・3・4制となった。この制度の例外は、短期大学であった。新制大学への移行の時、準備が不足して大学に移行できない高等教育機関に対する暫定的な措置として短期大学制度が導入された。ところが短期大学は地方に分散し、しかも学生として女性の比率が圧倒的になるという特色のある発達をしたことから、1964年から恒久的な制度となった。

それにたいして高等専門学校（高専）は、はじめから恒久的な制度として6・3・3・4制の枠外に設立された。1962年から65年にかけて次々と設立された高専は、高度成長による技術者不足を解消するために、中学卒業生を5年間の一貫教育によって「中堅技術者」を養成することを目的としていた。修業年限から見れば中卒で5年の教育機関ということで、短大卒と同じになる。しかし高専の設立当初から、4年制大学の工学部卒と同等の学力が目的とされていた。4年制大卒よりも2年間修業年限が短いにもかかわらず、同等の専門学力が可能とされたのは、次のような理由からである。大学工学部卒業生の場合、普通高校での一般教育、大学受験勉強、さらに大学入学後、高校での学習と重なる2年間の一般教養課程がある。専門教育は、大学2年の後半からであり、卒業までの教育時間はおおよそ3100時間である。しかし5年一貫の高専教育においては、高校と大学一般教養

課程での一般教育の重なりや、専門分野では必要としない一般教育をはぶくことによって、専門教育を3640時間以上をおこなうことができる（国立高等専門学校協会[1992]18-19）。

高専の設立直後、高専全体で入学志願者倍率が17.5倍（1962年）13.3倍（1963年）と10倍を超えた（国立高等専門学校協会[1992]410）。その最大の理由は、高専卒業生は修業年限は短大と同じであるが、高い専門教育のため、就職した場合、大卒者と同じ待遇を受けると宣伝されたことにある。この宣伝は、経済的に恵まれない中卒者を引きつけた。高専が経済的に恵まれない中卒者を引きつけた事実は、高専関係者によって早くから認識されていた。1984年の「大学設置審議会高等専門学校分科会の答申」は、「学部卒と比較して2年早く就職できるため、優秀ではあるが経済的に恵まれない中学校卒業生に、工業関係の高等教育を受ける機会を提供する意義は大きいものがある（国立高等専門学校協会[1992]285）」と明記している。

しかし、企業における高専卒者の待遇は、高専が期待したようにはならなかった。第一期の卒業生を送り出してから10年あまりたった時期に（調査時点は1979年？）国立高専協会事務局は卒業生と企業に対してアンケート調査をおこなった。「職務能力が大卒同等の場合の業務と給与」について、資本金百億円以上の企業は、「業務給与とも大卒同様」0社、「業務は大卒同等、給与は大卒以下」28社、「業務も給与も大卒以下」3社、「記入なし」7社、という結果であった。「官公庁」はそれぞれについて2、17、0、5という結果であり、大企業と官公庁は「業務は大卒同等、給与は大卒以下」としていることが明らかになった（国立高等専門学校協会[1992]61）。高専の1987年卒者と94年卒者にたいして

98 年におこなわれた日本労働研究機構の調査結果も、同様である（日本労働研究機構 [1998]78-87）。

結局、高専卒は大卒と同じ資格とはならなかった。当初のもくろみとは異なった結果になったのは、いくつかの理由が考えられる。

第一に、高専はきちんとした理念のもとで作られたのではなく、いわばご都合主義的に設立された。1950 年代中頃からの文部行政関係者の議論では、技術者不足への対応と短期大学の改革とが同時に論じられていた。暫定的な存在である短期大学に代わるものとして「専科大学」制度を作り、短期大学を「専科大学」に変えようとした。「専科大学」の入学資格は高校卒業程度、修業年限は 2 年または 3 年とする。必要がある場合には 3 年の前期の課程を有する 5 年または 6 年制とする、というものであった。この構想は「専科大学」案として 1958 年に国会に提出された。短期大学関係者は、この法案を、短期大学を大学制度の枠外に置くようにするものだとして猛反発し、審議未了に追い込んだ。その後もこの案は国会に上程されたが、成立しなかった。技術者不足が深刻化する中で、文部省は短期大学の改革とからめた技術者養成学校の設立をあきらめ、1961 年に高専設立法案を提出した。短期大学とは関係のない高専設立には短期大学関係者の反対もなく、法案は成立した（国立高等専門学校協会 [1992]15-17）。高専の設立は短期大学改革の試みが挫折したためであった。高専は高等教育機関としての独自の理念にもとづいて設立されたものではなかった。このことが、高専の社会的位置づけをたえず曖昧にし、今日にいたるも、明確なイメージを打ち出すことができないでいる。

第二に、高専設立の背景は、高度成長にもなう技術者不足の深刻化であった。大学工学部からの技術者供給が間に合わないと予測されていた。ところが、1960 年代に大学工学部が急膨張した。1960 年におよそ 9 万 3 千人であった工学部学生数は、65 年に約 17 万 5 千人に、そして 70 年には 28 万 4 千人まで増大した。10 年間で 3 倍になったことになる。それにたいして高専の学生数は 70 年に約 4 万 4 千人で、工学部と比較して小規模であっ

た（『文部統計要覧』）。工学部の急速な拡大によって高専による技術者養成の必要性は小さくなった。その上、高専が供給した「中堅技術者」の数が少ない以上、高専の存在感が薄れることは必至であった。

第三に、高専生の学力低下の問題がある。高専設立当初は 10 倍を超えた入学志願者倍率は、その後急速に低下し、設立 5 年目の 66 年には 4.5 倍に、そして 10 年目の 2.9 倍になり、それ以後はずっと 2 倍と 3 倍の間で推移している（『学校基本調査報告書』）。最初に設立された 12 校の国立高専のひとつである沼津高専で設立当初からかかわってきた教師たちの創立 10 周年記念座談会において、次のような率直な意見がかわわされている。教授 A「入学試験のとき、ぼくら採点した記憶があるでしょう。やっぱり一期二期三期あたりまでよかったね。とにかくもうこっちが感心するくらい」、教授 S「だからまあ相対的なことが相当あるにしても、ちょっと総体的に下がりすぎたかなあ（『沼津高専十年の歩み』 146-47）。そしてトヨタ自動車工業に就職した卒業生は、次のように報告している。「これはその当時の担当者から直接聞いた話ですが、（昭和 - - 野村）43 年に初めて高専卒を採用した際、大卒と同じ試験問題で試験したところ旧帝大に次ぐ成績の卒業生もいて、金の山を発見したように感じたそうです。もっとも私のような 5 期生ともなると大分レベルダウンしていますが。このレベルダウンにより当然会社の高専卒に対する評価は変化しているはずです。」（沼津高専同窓会『同窓会誌』第 4 号、1974 年、12 頁）

このような事情のため、高専卒業生は結局、大卒と高卒の間として処遇されている。これは学歴主義の強い日本企業において、当然の結果ともいえる。

今日、高専は設立当初の目的からいはずでに変質している。高専の設立目的は「中堅技術者」の供給にあった。ところが、2003 年に国立高専を卒業した約 8 万 8 千人のうち、就職したのはわずか 53%にすぎず、41%は大学などに進学している（『文部統計要覧』）。高専卒業後の進学率がこれだけ多いということは、多くの高専生にとって高専が大学進学へ

の経路となっていることを意味しており、高専が独自の専攻教育において人材を社会に供給しているとはいいいく状況となっている。

さらに高専は別の問題もかかっている。現在では大学工学部卒のうち 1/3 近くが大学院修士課程に進学している。有力な大学工学部では、大学院進学者の割合は圧倒的である。たとえば東北大学工学部では、2002 年度卒業生 907 名のうち 83.5%が大学院進学である（<http://www.eng.tohoku.ac.jp/eng/info/gakubu.html>）。高専教育は懸命に工学部卒と同等の学力を持とうとした。しかし、高専教育ではどのように努力しても大学院修士課程の教育に到達できない。大学院修士課程を終えた技術者が増えれば増えるほど、高専卒は「中堅技術者」としてではなく下級技術者として処遇されるであろう。このことはすでに高専当事者によって十分に認識されている。1991年に国立高等専門学校協会は大学審議会高等専門学校専門委員会への意見書に、「中堅技術者」の教育機関として発足した当初とは異なり、現在の高専は、「実践的（臨床的）技術者」を育成する研究教育機関として事実上定着していると認められる（国立高等専門学校協会[1992]275）と自ら記している。

高専という新しい学校制度は、日本の企業にインパクトを与えなかった。そして高専自身は、存在理由を失いつつある。

高専にかんするたったこれだけの文章を、私はなかなか書くことができなかった。私は高専制度に対して特別な感情を持っている。それは、日本語ではうまく表現できない。日本語の「恨みつらみ」ではなく、韓国語の「恨（ハン）」がおそらく適当な言葉であろう。

私は、1963年から三年間、沼津高専電気工学科に在学した。そして1966年3月、3年次修了とともに中途退学した。沼津高専は62年に最初に設立された12校の国立高専のひとつであり、私は二期生であった。上述の文章のなかで、「やっぱり一期二期三期あたりまでよかったね。とにかくもうこっちが感心するくらい」といわれている、その二期生であった。私自身は高専教育からの落伍者であり、出来の悪かったことは明白であるが、私がつきあっていた一期生と二期生についていえば、

文句なく優秀であった。彼らが高専卒という学歴で企業内生活を送ったことについて、私は高専という学校制度を作った人々を許すことはできない。

初期の高専生の気持ちをよく表しているのは、60年代末の学園紛争である。大学闘争の影響を受けながら、全国の高専で高専闘争がおこなわれた。それについて、『国立高等専門学校30年史』は学校側の立場から記述している。学校側の立場からとはいえ、その記述を通して、初期の高専生の怒りと悲しみが十分に伝わってくる。

高専闘争には、政治的党派はほとんどかわっていなかった。「総じて大学の紛争は、革マル、中核、反帝学評等々の派閥争いを内蔵しての学園民主化闘争であったが、高等専門学校の場合は学校内部の問題がその発端となっている」（p.42）。全国の高専で共通した争点として、「主事の添書」、「掲示と印刷物の自由化」、「服装の自由化」、「企業迎合教育」があげられている。「掲示と印刷物の自由化」、「服装の自由化」、「企業迎合教育」はわかりやすい要求である。「主事の添書」とは、高専学生会の通信にはかならず学生主事（教授）の添え書きを必要とした。そして、郵便物の中には学生主事の添え書きが入っているはずであるという理由から、こうした郵便物を学生主事がすべて開封していた。それに対して学生が、学生の自治活動への不法介入であり、文書の検閲であると反発したのである。

こうした管理教育への反発とならんで、高専制度そのものへの批判があった。その部分をそのまま引用しよう。

「高専教育の袋小路

創設初期の学生はそれぞれ10数倍の入試競争を征服して入学した粒選りの優秀者であった。高等専門学校の卒業生は学校教育法により「監督庁の定めるところにより大学に編入することができる」と法的には大学に編入により進学の路が開かれている形となっているが、実際にうけいれる大学は皆無であったため、これら粒選りの優秀者も進学の夢をすてて就職するか、高等学校卒業生に混って大学入試に挑戦するかの方法しかなかった。

創設して日の浅い国立高等専門学校協会

はあったが、総会において、各学校の所在地の大学に編入の機会を与えるよう働きかけることを申し合せるとともに、文部省に善処方の要請を行ったが両者とも反応がみられなかった。そのため「高専教育は袋小路」と断定して若者に将来への夢と希望を与えないと紙面を賑わす新聞も現れ、高等専門学校を選んだことが、あたかも失敗であったかの印象をもたせ、学生に厭学気分を誘発させた。若者は成長の段階で一様に自己の人生進路に疑問と迷いをもつものであるが、学生の中には、学年の進むにつれて性格と専門科目との関係に不安を感じている者もあり、その中の少数の者は、このマスコミの筆先で迷いの度を増し、そのなやみの銚先を教育方法と教育課程に向け、産業癒着の詰めこみ教育で非民主的で人権を認めていないとし、将来への夢を持つ者は高等専門学校を志望するなど、自己の出身中学の後輩に宣伝する者が生じたり、特定校では自己の失敗を後輩に繰り返させないためと称して入学試験の施行を妨害しようと高専教育を酷評した数千枚の印刷物をつくり受験者と父兄に配付しようと準備を進める者までみるに至った。」(国立高等専門学校協会『国立高等専門学校 30 年史』44)

学校側の記述であるため、例によって、マスコミなど外部からの否定的影響を強調し、「少数の者」の行為にすぎないなどとしているが、初期高専生の気持ちを如実に伝えている。「将来への夢を持つ者は高等専門学校を志望するなど、自己の出身中学の後輩に宣伝」したり、「自己の失敗を後輩に繰り返させないためと称して入学試験の施行を妨害しようと高専教育を酷評した数千枚の印刷物をつくり受験者と父兄に配付」しようとした、という記述には、痛切きわまりないものがある。参加人員の数からいえば、大学闘争の方が比べものにならないほど大規模であった。しかしこれほどせつない行動はなかったのではないか。私はこのような行動を起こした初期高専生の気持ちが痛いほどよく分かる。この時期、私はすでに大学に在籍していた。もし私が高専に在籍していたならば、どのような行動をとっただろうか。

高専闘争が起こったのは、1968 年から 70

年ごろの間であり、一期生と二期生は卒業していた。したがってこれらの闘争の先頭に立ったのは、三期生や四期生であった。沼津高専では、私も少しだけ知っていた三期生の男が中心的役割を果たしたと聞いたことがある。私の印象では、おとなしく、いかにも秀才らしい秀才であった。およそ学校側に反抗するなどということは考えられないような男であった。その彼が激しい行動にでた。彼の無念な心中を想うと、あまりにも哀しい。

高専卒は大卒と同じ待遇になるなどと、虚偽の宣伝をすべきではなかったのだ。「優秀ではあるが経済的に恵まれない中学校卒業者に、工業関係の高等教育を受ける機会を提供する意義は大きいものがある」などと、制度的な失敗を覆い隠して、居直るべきではないのだ。「優秀ではあるが経済的に恵まれない中学校卒業生」には奨学金などしかるべき手段を講じて、正規の高等教育を受けさせるべきなのだ。一期生や二期生はあと数年で 60 歳の定年に達しようとしている。彼らがたえず大卒と比較した高専卒の待遇を意識していたとはいえないだろう。しかし折りにふれて、高専卒ということを意識せざるを得ない時があったのも、たしかであろう。

私は高専 2 年生を終わるころから、中退することを公言してきた。電気工学科は 40 数人しかいないので、1 クラスであった。つまり 1 年生の時から卒業するまでずっと同じクラスメンバーである。私が中退することはもちろん、クラスの全員が知っていた。私はその時に愚かにも、彼らの気持ちを察することができなかった。私は私で厳しい状況の下にあった。すでに高専にいる気はまったくなく、専門科目にはなんの興味も持てないものであった。しかし 3 年生の授業科目すべてに合格しないと 3 年生修了とはならず、大学への受験資格も失う。他方で、大学では社会科学を勉強することを決めていたので、文系の大学受験勉強をおこなわなければならなかった。大学に合格した場合には、学費と生活費を自分でバイトで稼ぐことになるため学費の高い私立大学は問題外であり、国立大学に受かる必要があった。こうした事情のため、自分のことで精いっぱいであった。

結局私は、クラスメートの協力を得て、かろうじて、本当にかろうじて3年生の授業科目すべてに合格して3年次修了となった。某地方国立大学にも合格した。いろいろ考えて、浪人になる道を選んだが、クラスメートが私をどのように見ているのか、私は考えなかった。彼らは皆、私と違って、高専教育に疑問も不満も持っていないのだろう、と思ひ込んでいた。違ったのだ。彼らの高専教育に対する考えも、私にたいする見方も、ずっと複雑なものがあった。それは間違いない、と今の私は思っている。高専教育や、学校にたいする私のあけすけな批判は、いろいろな理由から高専に継続することを選んだ彼らを傷つけたに違いない。本当に申し訳なく思っている。

高専は、私にとってはなつかしい思い出というようなものではない。一期生や二期生の顔を思い浮かべながら、国家による詐欺行為への怒りと、高専を選んでしまった者たちへの哀切な気持ちとが入り混じったものである。そのような私が、高専について淡々と書けるはずがない。

(2004年9月20日)

高専について、いま少し述べておこう。高専は学生数も少なく、その内容が社会に広く知られているとはいえない。まして、40年前の創立期の高専については、ほとんどまったく知られていないであろう。私の記憶も断片的なものでしかないが、歴史にとどめるという意味では、書き留めておく価値があるかもしれない。もちろん、沼津高専の事例である。

高専は、高等教育機関である。高等学校は中等教育機関であるため、高専は高校とはまったく別のジャンルになっている。高等教育機関なので、教員は、教授、助教授、講師という職位になる。では大学と同じものかという、そうではない。大学と高専との違いについては、学校教育法が明確に規定している。「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」

「高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、

職業に必要な能力を育成することを目的とする」

つまり大学は「専門の学芸を教授研究」するのに対して高専は「専門の学芸を教授」するのであり、「研究」の義務はない。また、大学は「知的、道徳的及び応用的能力」を育成することを目的としているが、高専は「職業に必要な能力」を育成する。高専生は「知的、道徳的及び応用的能力」を期待されていない。中学を出たばかりの私は、もちろん、大学と高専とのこのような大きな違いを知らなかった。ずっと後になって学校教育法のこの条文を知り、たしかに高専とはこのようなものであった、と得心した。

高専には大学と違って、自治権がない。文部省によって任命される校長が、法律や規則の範囲内であればすべて独断で決めることができる。文部省によって任命される校長、と書いたが、文字通り文部省が任命しているのであり、大学のように、学内で選出された学長が文部省によって形式的に任命されるのではない。強大な権限を持つ校長は、国立大学工学部を定年退官した人物、あるいは定年間近の人物から選ばれる。沼津高専の初代校長は静岡大学工学部から来た井形厚臣という人物であった。私は井形校長とは直接話したことがないので、人柄は知らない。彼は高専設立3年目で私が2年生のときに急逝した。その後、名古屋大学工学部から土井静雄という男が2代目の校長として赴任してきた。この人物は、研究者としてはそれなりの仕事をしたようであるが、人間としては愚物としかいいようがない。工学の専門科目担当教員は、いずれも人間的な魅力の乏しい人たちであった。そうしたことも私の工学嫌いを増幅したのだが、しかし土井校長と比較すれば、彼らははるかにまっとうであった。私の中途退学について土井から呼び出しがあり、校長室で会った。私は啞然とした。その愚劣さに。

現在では高専の教官(教員ではない)の採用ルートは確立している。若手については大学院修了者を、その他については公募が一般的であろう。しかし高専を設立するときには、いろいろなところからかき集める以外になかった。高専の授業科目には、普通高校に比べ

れば格段に少ないとはいえ、国語、英語、歴史（たしか世界史と日本史に分化されていなかった）などの一般教育科目があった。こうした一般教育科目の担当教官については高校の教師を引き抜いてきた。機械工学や電気工学の専門科目の担当教官は、大学から移ってきた。

こうした混成部隊によく見られるように、大学組と高校組はしっくりとはいっていなかった。正直といえば正直であるが、そうした感情を学生の前でも隠さなかった。ある大学組は、ある時、「ああ、先生（一般科目担当）は高校出身ですからね」と学生の前で発言、高校組を低く見ていることを露骨に示していた。他方、高校組からは、次のような発言があった。「あの人たちは静大（静岡大学）の万年助教授で、大学でも扱いに困っていたので、私が教育委員会にいるときに、沼津高専に斡旋してやったのです。これを聞いたとき、私は大学についてまったく何も知らなかったので、高校組が「万年助教授」を見下していることは理解したが、それ以上は理解できなかった。

ずっと後になって、私はなぜ「万年助教授」が高専に来たのかを理解した。大学から高専への移動については、二つの大きな問題があった。一つは、すでに述べたように、大学は教育研究機関であるのに対し、高専は教育機関であった。高専の実験設備は教育用であり、研究用ではなかった。つまり研究を志す人は大学に残るのが当然であり、高専に移ることは事実上、研究の放棄を意味した。それに加えてさらに大きな問題があった。給与である。大学は俸給表として教育職（１）を適用される。高専関係者は高専設置の時に、高等教育機関なので大学と同じく教育職（１）を高専の教官にも適用するよう要望した。しかし実際には教育職（１）よりも低い教育職（４）という俸給表が新設され、高専の教官に適用された。研究はできない、給与は下がるという条件で大学から高専に移るとすれば、よほどの事情がある場合に限られる。よほどの事情は、実際には、高専の設立当初は定年が大学よりも遅かったため大学の年配教授が再就職という形で高専に移る場合と、「万年助教

授」の場合である。

具体的な給与計算を知らないためはっきりとはいえないが、教育職（１）の「万年助教授」と教育職（４）の教授とではおそらく高専の教授の方が給与は高いと思われる。「万年助教授」だと４０歳くらいでほとんど昇給しなくなるからである。つまり高専と大学との制度的な違いを前提とすると、大学から高専に移動する人は、「万年助教授」が主力となる。高校組にしてみれば、大学で通用しなかったと思える「万年助教授」が高専に移ってきて、一般教育担当の高校組を軽んじることは、我慢できないことであったであろう。

設立当初の大学組と高校組に加え、やがて新規大学院修了者が採用をされるようになった。大学組はほとんどが定年まで高専に勤務した。高校組は、チャンスがあれば大学に移った。たとえば数学の教官は、静岡大学教養部に移った。新規大学院を修了者は、もともと大学が就職希望先であり、運がよければ大学に移ることができた。高校組のなかには、再び高校に戻る人もいた。地理の教官は、私が信頼した数少ない教官のひとりであったが、私が中退した翌年、普通高校に戻っていった。彼がどのような理由から高校に戻っていったのか私には分からないが、大学組と高校組の確執に嫌気がさした可能性が強いと、私は思っている。

やはり、というべきか、校長の右腕と左腕といえる学生主事と教務主事は大学組が占めた。私は学生主事と犬猿の仲であった。といっても、相手は権力者であり、こちらは一学生なのであるから、勝負にならないことは明々白々であった。学生のやることにいちいち介入し、学生への全面的な権力的管理をおこなっている張本人だ、と私は思っていた。後から判断すると、それは半分正しく、半分は誤りであった。半分は誤りであったというのは、全面的な管理は、彼個人の判断でおこなったというのではなく、全国の高専すべてでおこなわれていたからである。彼はその実行者にすぎなかった、とも言える。しかしたんなる実行者とも言えない。非常に熱心であったからである。所帯が小さいとはいえ（１学年１２０人）彼は大半の学生の名前と顔を

知っていた。まして、多少とも目立つ学生については、家族状況とか勉強状況とかについても把握していた。私はきわめて反抗的であるという意味で、彼にとって目立つ学生であった。さまざまな折りに、私に説教した。私に説教など無意味であると彼にもわかっていたはずである。それにもかかわらず説教を繰り返す彼を私はますます嫌悪した。

彼について、忘れることのできないシーンがある。一年生と二年生のとき、私は卓球部に所属していた。陸上部長距離の友人が、お前も少し走れ、というので、時々ランニングをしていた。沼津高専では毎年1月にマラソン大会と称する全員参加のランニング大会を開いていた。8キロから9キロの距離ではなかったかと思う。2年生のとき、私はベストテンに入るべく飛ばしたが、後半になって腹痛になり、18位か19位に終わった。3年生のときには、大学受験が目の前でもあり、当初は参加する気はなかった。ところが実際に大会の日が迫ってくると、なぜか参加したいと思うようになった。ずっと練習をしていないので、順位は惨憺たるものであったが、それでも上位3分の1には入っていた。走り終わって友人と2人で雑談していたところへ、学生主事がやってきた。また不愉快な会話が始まるのかと思って身構えると、彼はニコニコと笑って、じつに優しい声で「野村君、走ったんですね。よく走りましたね。入試が近いから君が参加するはずがない、と思っていたんですが。よく走りましたね」と私をほめた。彼が心から私をほめていることは、私にもよくわかった。しかし彼がなぜ私をほめるのか、私にはまったく分からなかった。あまりにも意外であったため、私は一言も返事ができなかった。

私が大学受験資格を得るためには、すべての授業について合格点を取ることが必要であった。1科目でも不合格となれば、私は「3年次修了」とはならず、大学受験資格のない中卒となるはずであった。そして私が不合格点をとる可能性がもっとも大きかったのは、彼が担当していた応用物理であった。しかし私は、彼に頭を下げて合格点を乞うような真似は絶対にしたくないと思っていた。結果と

して彼は私に合格点を出した。そのことを知ったとき、私は、マラソン大会の後で彼は私に単位を出すことを決めたのだ、と思った。私がいかに出来が悪く問題の多い学生であるとしても、中退することが決まっており、大学受験資格の有無が私のその後の人生を決めることは明白である以上、不合格点を出すには忍びない。しかし合格とするには問題がありすぎる。おそらく彼はこのような考えで迷っていたと思われる。そのようなときに私が、全学の行事として重視されていたマラソン大会に参加した。彼としては、私に合格点を与える絶好の理由ができたと思ったのではない。

高専の教官となった人たちは、どのような気持ちでいただろうか。私は高専を中退した後、沼津高専の教官とはだれとも会ったことがない。

(2004年11月1日)

高専について書くのは前回で終わりにしようと思っていた。ところが先日、ある高専を中退した人からメールをいただいた。そこでもう一回だけ高専について書こうと思った。

高専は何の準備もなく設立された。1962年に第一期生が入学したとき、校舎すらなかった。沼津高専では中学校の古い校舎を借りて仮校舎とし、そこで授業をおこなった。高専の設立前には、学生は全員が寮にはいるという噂もあったが、校舎もないような状態で寮があるはずがなかった。しかしどうしても寮の必要な学生がいるため、沼津市から臨海寮を借り受けて寮とした。臨海寮というのは、沼津の有名な千本松原(せんぼんまつばら)のところにあった夏だけの集団合宿用の寮であった。古くてぼろくて、通年で住むのはとても無理と思えるようなものであったが、そこを一期生の寮とした。一期生はこの海沿いにある寮から、かなり距離がある中学校まで通学した。ちなみに千本松原は昔から景色のよいところとして有名であり、若山牧水の「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」の歌碑がある。

私を含む二期生が入学するとき、校舎がかるうじてできた。仮校舎の中学校よりももっ

と山奥になった。寮は学校の敷地内に一期生を収容できる分だけでき上がった。一期生はその寮に引っ越して行った。そこで二期生の寮として臨海寮がそのまま使われることになった。私はこの臨海寮に入寮した。この臨海寮から山奥の学校まで毎朝スクールバスが出た。しかし帰りは、寮生の帰り時間がまちまちなので、一般のバスを使うことになった。直通のバスがないため、駅までバスで戻り、駅で別のバスに乗り換えるか、あるいは時間がかかるものの駅から歩くという方法で寮に戻った。私のような田舎出身者にとっては沼津市でもずいぶん都会に見え、沼津市の中心街を歩くのが楽しみで、よく歩いて帰った。

その点について、どうでもいいことだが不思議と印象に強く残っていることがある。沼津の中心街に仲見世通りというのがあり、その道を通って寮に戻ることが多かった。ある日、その通りを歩いていると、突然、「赤い夕陽が校舎を照らし」というのはじめて聞く曲が大きな音で流れてきた。この曲が舟木一夫の「高校三年生」であることがすぐわかった。曲は気に入ったが、「そういえばオレには高校三年生がないのだ、「高専五年生」などという歌はできるはずもないし」と思い、複雑な心境になった。

高専に入学した当初、学校は二つのことを強調していた。一つは中堅技術者ということであり、いま一つは「学生」であるということである。

高専教育は中堅技術者を育てることが目標であった。耳にタコができるほど、中堅技術者になるのだ、と教えこまれた。校歌とは別に「沼津高専音頭」という歌があり、その歌詞が沼津高専の教育目標を明確にしていた。思わず笑ってしまうような歌詞だが、作詞者は大まじめに作ったのだろう。しかしこの「沼津高専音頭」はだれが作詞作曲したのだろうか。沼津高専十年史には、「沼津高専音頭」なるものについてまったく記述がない。学生が勝手に作ったとは思えないのだが。ところでその歌詞は、不正確かも知れないが私が覚えている限りでは、次のようなものであった。

浜は千本どんと打つ波よ

男度胸と意気の良さ
若い命を5つ年かけて
明日の日本(にほん)を
明日の日本(にほん)を創るのさ
工業なんだそうなんだ
中堅なんだ日本(にっぽん)の
おいら沼津の高専生

「沼津高専音頭」は、まずはじめに男の学校であることを「男度胸」として強調している。たとえ事実上は男子校であったとしても、建前としては共学であるが、音頭では本音が強調されている。そして日本、工業、中堅がキーワードとなる。

中堅がたえず強調されたにもかかわらず、実のところ、中堅とは何であるか、不明確であった。国語の教師が、「中堅とは上と下の中間ではない、中心である」と訓話したことがあるが、いかにもいかがわしい話で、もし中心であるならば、中核技術者というような表現の方がいいだろう。結局、概念がよくわからないまま、中堅技術者たれ、とたえずお説教されていた。

学生であることが強調された、というのは次の点である。入学してからすぐ、学生主事はわれわれに語った。「皆さんは学生です。皆さんと同世代で高校に通っている人たちは生徒です。学生と生徒は大変違います。生徒は学校が決めた細かい規則や命令に従います。学生は自分で判断して自分の行動を決めます。大学生と同じです。皆さんは学生であることに誇りを持ってください。」この学生イデオロギーは私を大いに喜ばせた。そして事実、1年生のときには、たしかに学生であると実感した。そう感じたが一番大きな理由は、臨海寮での寮生活であった。

臨海寮の施設は、ひどいものだった。トイレにしても風呂にしても。居住空間は8人一部屋で、部屋の真ん中が共通部分であり、個人のスペースは一人が1畳余を占拠していた。居住スペースはいわゆる蚕棚ふうになっており、2層になっていた。各人は自分の居住空間をカーテンで仕切っていた。そこだけがプライバシーのある部分であった。私は二階部分にいた。壁、といってもベニヤ板一枚隔て

た隣部屋の寮生と気が合ったので、ベニヤ板をくり抜いて相互に行き来できるようにした。私の部屋には電気工学科の学生が6人、機械工学科が2人だった。学校で電気工学科のクラスは1クラスしかないで、この6人の電気工学科の寮生は、24時間365日生活を共にしている感じだった。中学の時にもちろん、人には個人差があると分かっていたが、こういう24時間365日の共同生活をしたとき、個人差というのは中学生の時に考えていたよりもはるか大きいものであると思わざるを得なかった。施設はひどかったが、生活は楽しかった。個人の、あるいは集団としての寮生の意思が尊重されているように思えた。学生だと実感した。

しかし学生であるという実感は、2年生になるとともに完全に消滅した。生徒どころか、生徒以下ではないかと思うようになった。そのように大きく変わったのは、2年生になって学校の敷地内に寮ができあがり、そこに移ったからである。施設としてはたしかに改善されたが、管理形態は最悪になった。学校は詳細な寮規則を一方的に押しつけ、さらに寮生の中から各種の寮委員を選んで任命した。部屋はプライバシーを守るような形にはなっていなかった。寮生活は24時間中、規則、命令、監視下にあった。私はタコ部屋にいるような気がした。学校は山の中ともいえる場所にあり、外界と完全に隔離された場所に閉じ込められて100%管理されている、という感じであった。高専を中退した後で冷静に判断したとき、なぜ1年生と2年生でこんなにも違ったのかを理解できた。

高専教育は、もともと、私が2年生のときに受けたような管理教育を目指していた。国立高専30年史に次のような文章がある。

「新しい学校制度の高専は中学卒業直後の若年から5年の一貫教育で概ね学部卒に近い教育効果をあげることが目標となっているため、教育課程の編成、学習指導に格別の工夫が必要であり、課外活動、精神衛生、保健管理等の厚生補導面についても細心の注意と配慮が要求され、大学に屢々見うけられる厚生補導不在は絶対に許されない。」

1年生の時のような自由な雰囲気は、学校

が創立されたばかりだという特殊事情のために生じたのだろう。第一に、最初の1、2年は授業内容を含めすべてが暗中模索の段階であり、教官は多忙をきわめ、学生の管理に十分な時間をさくことができなかった。創立三年目にして少し落ち着いたので本格的な学生管理に乗り出した。第二に、一年生の時の臨海寮では、寮務主任が沢田真養さんだった。地理を教えていた。沢田さんは寮生を信頼し、お説教めいたことを言ったこともなく、ましてや寮生の生活に介入しなかった。つまりわれわれを学生として接してくれた。沢田さんのこの個人的な方針が臨海寮を居心地の良いものにしていただと私は思っている。

一年生のときには、私には高専を中退するなどという考えはまったくなかった。将来のことを考えたことはなく、学生生活というのはこういうものだ、と満足していた。しかし2年生になって完全な管理教育に入ると、私は急速に高専教育に対して反感を抱くようになった。とりわけ学生主事にはだまされたという気持ちが強かった。授業をサボるようになり、授業に出席していたとしても、授業とは関係のない本を読んでいた。そのころ読んでいた本をすべて覚えているわけではないが、たとえば山岡壮八の『徳川家康』を毎日図書館から借り出し、授業中に一日1冊ずつ読み、すべて読んだ。もっとまっとうな本を読んでいたならば、と悔やむことがないではないが、そのころなぜか和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』とか『風土』なども読んでいた。なぜこんなふうな組み合わせになったのか、今となっては思い出すこともできないが、多分、図書館のせいである。図書館は貧弱だった。まして社会科学系の本はほとんどなかった記憶がする。数少ない小説や人文科学系の本を手当たり次第に読んだような気がする。和辻にしても、彼の思想内容を知っていて読み始めたのではなく、読んで始めて和辻の考えに触れた。

授業内容がわからなくなったから授業をサボるようになったのか、授業をサボるようになったから授業内容がわからなくなったのかはわからないが、とにかく加速度的に授業内容が理解できなくなった。一般教育科目は何

の問題もなかったが、学校に対する反発が強まるにつれ、専門教育への嫌悪感が増していった。私は中学生の時には、科目を問わず、授業内容はすぐ理解できた。といっても、前提条件があった。私の中学校は静岡県の中で学力の低い地域だった。本当かどうかは知らないが、中学生の時に、静岡県でもっとも学力の低い地域だと聞いた記憶がある。だから授業もできるだけやさしくしていたのだと思う。しかし同じ授業を聞いていながら、よく理解できない同級生も多かった。その当時私は、授業を理解できないということが理解できなかった。ところが高専二年生になって落ちこぼれ学生になったとき、授業を理解できないということがどういうことか、非常によく理解できるようになった。頭の中にまったく何も残らないのである。右の耳から聞いたことが左の耳から抜けていく、目で読んだことが鼻から抜けてゆく、という感じであった。要するに、分かるということは頭の中に何かが残ることであり、分からないということは、なにかが頭の中を通り過ぎるだけである。このことがわかってから私は、分かりそうもないことを分かって努力はムダであると確信した。

管理教育であったことと、高専生が政治問題へ関心を持たなかったことは表裏一体である。高専で政治問題を議論した記憶はまったくない。図書館に社会科学の本がほとんどなかったことも意図したことであろう。このことで私は一つのことを思い出している。1965年のことだったが、ある日私は親しくしていたある一期生の下宿に遊びに行った。彼の部屋には何冊かの雑誌が広げられており、彼はそれらを読んでいるところであった。雑誌は『世界』など総合雑誌で、いずれも日韓条約を特集していた。私は衝撃を受けた。学生ならば当然知っていなければならないことについて私は何も知らないのだ、と思った。日韓条約をめぐる賛成論と反対論があることくらいは私でも知っていたが、賛成論や反対論の中身についてはもちろん、条約の内容について何も知らなかったし、関心もなかった。彼は日韓条約について私に何も語らず、ただ雑誌を片付けただけだった。私は私で、

日韓条約とは何ですか、などと聞くこと自体私の無知をさらけ出しているようで恥ずかしく、何も質問しなかった。いつものような雑談をして私は帰った。しかし高専生の中にもこういう問題意識を持っている人がいることを知り、私も勉強しなければ、と思った。

高専卒業生について、たしかに専門知識は備えているが自立心に乏しい、とか、専門知識に比べて一般教養がなさすぎる、というような評価が広くおこなわれている。私はそうした評価が誤っていると言う気はない。私自身も、高専教育の欠陥を痛感したことがある。大学に入学してしばらくして、寮生同士で雑談をしている時、なんのテーマだったかは覚えていないが、誰かが、「それはエコール・ド・パリの真似だろう」と発言した。私を除く全員が、そういえばそうだ、とうなずいて別の話題に入ってしまった。私はエコール・ド・パリを知らなかった。私が大学に入学した60年代後半には、まだ学生の見栄というものがあった。生半可な知識を持ってマルクス、ヘーゲル、サルトルなどについて議論するのである。見栄でする議論の時には、お互いにそれが無理をした議論だということをごく承知していた。そういう時に私の知らない言葉がでてきても、オレの知らない言葉だが、どうせその言葉を使っている本人もよくは知らない言葉だろう、と思ったに違いない。しかし見栄を張る必要のない何気ない雑談の中だったので、私は知識不足を認めざるを得なかった。お前は高専教育からの落伍者だからお前の例は高専教育の水準を表していない、というようなコメントは的はずれである。私は高専の専門教育からは完全に落後したが、一般教育については何の問題もなく単位を取っている。

高専卒業生が自立心に乏しいとか、一般教養が欠けていると批評されるのは、高専教育の特質にある。徹底した管理教育をおこない、そして一般教育科目を削って専門教育を増やしているのであるから、当然ともいえる。初期の高専生は、場当たりの教育政策の被害者であると私は考えている。教育改革は、その教育改革に巻き込まれた学生たちの生涯を決めるような重要なことである。高専を作った

当事者たちは、そのようなことは考えもしなかったであろう。たんに目の前に技術者不足があり、それを当面どのように埋めるか、というご都合主義的な問題関心しかなかった。

3回にわたって初期高専について書いてきたが、書きながら思い出したこともいくつかあった。また数年前に沼津高専の同級生と連絡が取れ、卒業写真などを送ってもらったことから思い出したこともある。書きながら、あらためて高専の3年間とは何だったのか、考えた。そして意外にも、この3年間が現在の私につながるかなりの部分を決定したのではないかと考えるようになった。

なによりも、私が社会科学を勉強する気になったのは、高専教育のためである。高専教育のために工学系統の勉強が完全に嫌になり、私が勉強したいのは人間と社会についてである、と強く思うようになった。大学4年生になり進路を決めなければならなくなったとき、大学に進学したそもそもの目的を思い出した。私は人間と社会を勉強しに大学に入ったが、未だ自分の考え方持ち得ないでいる。私の考えていることは、しょせんは、人の受け売りにすぎない、大学院に進学して自分なりの考えを見つけよう、と思った。

第二に、高専生活の中で権力と権威に対して徹底した反感を抱いた。学校は権力であり教師は権威であった。少なくとも彼らは、そういう態度であった。螻蛄の斧であることは百も承知で私は反抗した。権力と権威を自負するものに対する私の嫌悪感が高専生活で決定的となった。

第三に、学校と教師を否定した私は、勉強とは自分ひとりでするものであり、人から教えられるものではない、と思うようになった。こういう考えからは、いわゆる師弟関係は成立しがたい。これまでお世話になった人は多いし、いろいろ学んだ人もかなりの数にのぼるが、いわゆる師弟関係とはならなかった。

第四に、進退きわまるような場合でも、なんとかなるのではないかという楽観論を持つようになった。高専三年の時は、私も追い込まれていた。大嫌いの専門科目の単位をとらなければならない、ひとりで受験勉強をしなければならない、親からは中退を猛反対され

る、たとえ大学に受かってもし学生生活を送るだけのカネを稼ぐことができるのかどうか、難問山積という感じであった。しかしどこかで、なんとかなるのではないかという気がしていた。そして実際なんとかなった。それ以後、研究論文を書くことができるのかどうか、一人前の研究者になることができるのかどうか、就職できるかどうか、など不安を覚えることはあっても、なんとかなるのではないかと、思いが強かった。

これで私の高専物語は終わる。私の高専生活はわずか三年、しかも40年も前の話である。それにもかかわらず、今となってはそれも楽しい思い出、というような気持ちになれない。何気なく脇道にそれてしまったことに対して初期高専生が支払った代償はあまりに大きすぎるのではないかと、その思いが脳裏から去らない。

集団就職（2005年12月4日）

今日の日経の「半歩遅れの読書術」欄に、竹内洋氏が加瀬和俊『集団就職の時代 - 高度成長のいない手たち -』（青木書店、1997年）について語っていた。中学を卒業して東京に就職した女性が竹内氏に写真などを添えて手紙を送ってきた。彼は激励の手紙ひとつ書かなかった。加瀬氏の本の内容に触れながら、その女性を励ますことのできなかつた後悔を記している。

私は加瀬氏の本を、出版直後に読んだ。そして、竹内氏と似たような感想を持った。もちろん私には、手紙をくれる女性などいなかった。そうではなくて、中学を終えるとき、就職していく同級生の気持ちを私はまったく察することができなかった。そのことが、苦い思い出となってよみがえった。就職していく同級生の気持ちが分からなかったのは、もちろん主として私自身の鈍感さによっている。しかしそれがすべてではない。

私が中学を卒業した1963年当時、地方では多くの中卒者が就職していた。静岡県小笠郡大須賀町で唯一の中学校であった大須賀中学校では、350人ほどの卒業生のうち約半数が中学を出て働いた。中卒で働くということは、ありふれた現象で、とくに感慨をもよお

すような事柄ではなかった。当時はそのように考えられていた。卒業者名簿を見ると、就職者の大半は明らかに中小零細企業であると思われる会社に就職している。大企業に就職したのは、紡績会社の労働者となった女性が主力で、35名いる。紡績会社の女性労働者は勤続年数が短かったので、おそらく彼女たちの多くも短い勤続でやめたと思われる。

中卒者が就職するということは、たしかにありふれた現象であった。しかしそれは、厳しい現実がありふれていたということの意味していた。私は後になるまで、そのことに気づかなかった。

大須賀中学校では、中学卒業時に、将来の進路がほぼ見通すことができた。卒業時に、半数が就職した。残り半数は高校に進学したが、進学した高校によって、将来さらに大学に進学するかどうかはほぼ決まっていた。大学に進学するであろう者たちは、静岡県立掛川西高校に進学した。それ以外の高校に進学した者たちは、そのほとんどが高校卒業で就職することが予定されていた。掛川西高校進学者は、その意味で、小さな田舎町のささやかなエリートであった。男性18名、女性3名、計21名がそれに該当した。卒業生のわずか6%にすぎない。私は沼津高専という怪しげな新設学校に進学したので、ささやかなエリートコースから外れていた。とはいえ、間違いなく私もささやかなエリートコースに近いと思われていた。

私は『集団就職の時代』を読んだとき、次のような感想を持った。中学を卒業したとき、私にとっては、そしておそらく高校に進学したほとんどの者にとって、就職していく同級生はある意味では当たり前の選択をしたのであり、とりたてて感慨をもよおすようなものではなかった。しかし、就職していく同級生にとって、高校進学者、とりわけ掛川西高への進学者はどのように見えたのであろうか。彼らは深い感慨を持って就職していったのではないか。

大須賀町では、集団就職という形をとらなかった。その当時、東海道線袋井駅から大須賀町まで軽便鉄道が走っていた。少なくとも私は、就職者たちが教師に引率されて軽便鉄

道で就職先に移る光景を見たことがなかった。個別に就職していったものと思われる。

その時からすでに四十数年がたった。還暦を間近に控え、中学を出て就職していった同級生がどのような道を歩んできたのか、知りたいと思う気持ちがますます強くなっている。